

# 西日本豪雨・被災地発信の取り組み『総社市フリマ方式』とは



岡山県総社市長片岡聡一  
@souichikataoka

フォローする

総社市は支援物資を何故フリーマーケット風にしているのかよく聞かれますが、よくありがちな、市が一方的に避難所に支援物資を配給するより、被災者に好きなものを選んで貰いたほうが、被災者と市が同じ目線にあると考えているからです。



7:14 - 2018年8月4日

『いかに支援すべきか』という議論は、阪神淡路大震災、東日本大震災などの災害のたびに繰り返されており、「被災地域での仕分けの負担を減らすため、あらかじめ定められた物資を自治体単位で集積して避難所に配送する」「個人からのごまごました物資は送らない」といった支援方法が徐々に定番となってきました。

今回の総社市の方針は「個人物資を断らない、平等にこだわらない」という、ここまでできてきた流れの

総社市は、過去の支援活動によって「災害の先輩」である地域と助け合える関係を作っていたり、西日本水害では近隣地域への支援者を受け入れる『ボランティア拠点』にいち早く名乗りをあげるなど、災害に対し「地域」として積極的に活動してきました。

しかし今回の『フリマ方式』で感じたのは、それぞれ売り手と買い手のように相手を思いやる、人と人単位の深すぎず熱すぎない心遣いでした。

市長自らがSNSで支援の申し出を受け入れ感謝を述べ

「フリマ方式」とは  
総社市役所の一角に衣類や生活用品をフリーマーケットのように並べる。被災した人たちが訪れ、必要なものを持って帰る。総社市は物資を断らずにすべて受け入れ、ボランティアが整理して並べ、あとは市民が自分たちで必要なものを決めていく。足りないもの、供給過剰なものがあれば総社市が声を上げる。

衣類1つ、お皿1枚でも人には好みがあり、行政や支援する側主導の押し付けがましい援助はしないというスタイルだ。フリーマーケット方式の導入は、総社市長の片岡聡一が決めた。

「不要だから、迷惑だから断るといったことはしない。何が不要かは行政が決めることではなく、市民のニーズが決めることです」

いままでの大災害のたびに話題になったのが「被災地に古着を送る」ことの問題でした。洗濯もままならない被災地に状態の悪い古着を送られて仕分け担当のボランティアが苦悩する、という事態が過去になんども繰り返されてきました。

「なんでも受け入れます」という総社市の方針を聞いたとき、真つ先に心配になったのがその点でしたが、予想に反してそのような話がほとんど聞かなくてよかったのは「被災者が自分で選んで持ち帰る」というシステムが周知されたためかもしれません。

送る側も、ひとくくりの「被災者」に対してではなく「自分の送るものを選ぶ相手(フリマのお客様)」のことを想像し、自然と「選ばれるもの、役に立つよいものを送ろう」と考えて行動しはじめる。「こんなものが必要とされていますか」「大きな物ですが受け入れられますか」というやりとりも多くあったと聞きます。

決して簡単ではない『フリマ方式』ですが、もうひとつの支援の流れになるかもしれません。



対局と言っているものですが、総社市だけでなく周辺の被災地域の住民たちにも活用され、感謝されながらこの10月1日に終了しました。

we support ↓

**RQ**  
災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう！大作戦しんぶん」改題

復興支援「すけさきた」

「すけさきた」とは  
宮城県登米市あたりの言葉で  
「ボランティアに来てよ」という意味である。

OCTOBER  
**11**  
2018